

2018年9月2日

福音書からのメッセージ

そこで、ファリサイ派の人々と律法学者たちが尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか。」

(マルコによる福音書7章5節)

「食事の前には手を洗いましょう」。わたしたちは子どものときから、そう教えられてきました。確かに手を洗わないでご飯を食べると、外でついたバイ菌が体内に入ってしまう危険性はあるでしょう。また汚い手で大皿のサラダを取り分けられても、食べるのに躊躇してしまうというのも本音だと思います。

イエス様の弟子たちの中に、汚れた手のままで食事をする人たちがいました。ファリサイ派や律法学者です。しかし彼らは、「そんな食べ方をすると身体を壊すかもしれないよ」と注意したくて、イエス様の抗議したのではありませんでした。

彼らファリサイ派や律法学者たちは、旧約聖書に書かれた教えを忠実に守っていました。そして今日出て来た「昔の人の言い伝え」には、「汚(けが)れ」から身を守りなさいというものもありました。

「洗う」という行為は、「けがれ」を清めるおこないです。それは、ほこりや泥などの「よごれ」ではなく、宗教的な「けがれ」を身に帯びないためのものでした。当時のユダヤでは、罪を犯した人や徴税人、娼婦、また汚れた霊に取りつかれた人など、けがれたとされた人たちに触れると、自分もけがれてしまうと考えられていました。また食べ物などにも、清い物とけがれた物があり、彼らはけがれた物を避けて食べていました。

そのことで彼らは、自分を神さまの前に立てる清い者にしようとしたのです。その結果、彼らは自分たちがけがれていると判



断した人たちを排除していきました。

しかしイエス様の弟子たちは、イエス様のおこないを間近で見えていたのでしょうか。イエス様は、罪人や徴税人たちと食事をし、病人に手を置き、当時の社会では相手にされなかった女性や子どもたちと関わっていました。けがれた者としてではなく、一人の大切な人間として接していかれました。だからイエス様は、食事の前に手を洗う必要がなかったのです。イエス様は、けがれた者になど触れてはいないのです。そして弟子たちも、イエス様のそのおこないに倣ったのではないのでしょうか。

わたしたちは自分の力だけで、神さまの元に行くことなど出来ません。それはわたしたちが清くない、けがれた者だからです。自分の心の中をのぞくことができたとしても、わたしは怖くて見ることはできません。それは心の中が真っ黒で、深い闇に包まれていることを知っているからです。

だからこそ、イエス様が必要なのです。けがれたままのわたしたちでも、イエス様が包んでくださる。「大丈夫」と声を掛けてくださる。手を差し出してくださる。

その愛に感謝しましょう。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

Tel/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannnari.com/>